

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：31604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K20866

研究課題名(和文) 藤樹心学の思想史的展開と意義に関する研究

研究課題名(英文) Research on development of intellectual history and historical significance in Studies of Toju

研究代表者

高橋 恭寛 (Takahashi, Yasuhiro)

東日本国際大学・東洋思想研究所・准教授

研究者番号：70708031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、徳川初期の儒者中江藤樹が説いた独特な儒学思想は、彼の死後どのような展開を遂げたのか、弟子筋の者たちの思索を明らかにした。代表的後継者の直弟子淵岡山は、藤樹が説いたような一身における修養論を、社会生活の場面にも応用して、自らの学として展開させていった。ただそのほかの継承者たちは、学祖の中江藤樹を尊崇し、藤樹の言説を用いて自らの学説を固めていった。「藤樹学」として自らの学問を自覚化していったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study clarified how the unique Confucian philosophy proposed by Takae Toju developed after his death, by examining the contemplative processes of his students. Fuchi Kouzan, his direct student and one of the most important successors of his studies expanded the application of the cultivation of the mind theory for individuals to "social life" scenes, and developed his own take on the philosophy. However, his other successors venerated Toju as the founding father of the philosophy, and secured their own academic theories by quoting Toju. This paper confirmed how they came to identify their studies as "Toju-gaku," or "Studies of Toju and His Philosophy."

研究分野：人文学

キーワード：江戸儒学 思想史 教育史 心学 陽明学

1. 研究開始当初の背景

徳川初期の儒者中江藤樹は中国明代の「陽明学」を受容して、世間では「日本陽明学派の祖」と称されている。その一方、研究の最前線では藤樹の思想性としては「陽明学」と一線を画することが明らかとなっている。そのため藤樹の思想を新たなかたちで描き出す必要がある一方、藤樹の弟子たちも「陽明学派」という括りでは、もはやその特徴を言い表したのものとして妥当ではなくなってきている。藤樹後学たちの学問が「陽明学」でないならば、どのような学問として自らを規定し、世間に学問を開示していたのかという問いが改めて浮上する。そのため、藤樹の思想分析の視角を失い、藤樹研究及び、藤樹後学に関する研究も皆無に等しい。藤樹の学問は、これまでの研究の蓄積により、初学者における入学の方法論を模索したものと捉え直したことで単なる「陽明学者」とは異なる藤樹の学問を描き出すことが出来る。それによって、藤樹後学たちも藤樹の課題をどのように継承してきたのかの分析視角を手に入れることができる。

また徳川儒学研究において藩校や学塾における教育については、様々なかたちで研究されている。それに対して、藤樹後学たちのような非「学校」的な学問サークルでの「学び」がどのように成就され継承されていったのかを見てゆく必要がある。

2. 研究の目的

もはや「陽明学」的ではないと見なされた藤樹とその後学たちの思想性の特徴を改めて描き直す必要がある。それによって徳川時代を通じて何故藤樹の教えは保持され継承されていたのかについて解明することを目的とする。藤樹の抱いていた「学習者がどのように学問へと着手することが出来るのか」という課題は、後継者たちにおいてはどれほど継承されたのかを明らかにする。このような学問の方法論を藤樹とその後学より分析することは、徳川時代における儒学学習の多様性を解明し、どのような意識で儒学学習へと向かっていったのかについての理解を深めることが出来る。また、このような藤樹学派における入学への方法論の分析は、現代においても人々にとって「学び」とは何かを考える材料を与えることに繋がる。

3. 研究の方法

まずは藤樹の直弟子たる淵岡山が、師匠・中江藤樹の課題であった「どのようにして学問へと『いざなう』のか」や「学問への志はどのように立てられるのか」などの問題に焦点をあてて分析し、「学問へのいざない」や「挫けた学習者」や「学問への志」など、どの点を岡山がより重視したのか、淵岡山の教示方法の独自性を浮かび上がらせた。

直弟子だけではなく、その後の藤樹の学統を継ぐ者たちが、藤樹の教えをどれほど保持して展開させていったのか、ただ学者たちの「独自性」のみを明らかにするのではなく、藤樹の教えのどのような点を重視して継承していたのかを見てゆく。幕末まで継承されてきた会津の学統や、同じく幕末どころか現代に至るまで顕彰に励んでいた藤樹書院における藤樹学の展開についても取り上げる。これらの分析を経ることで、彼等が「藤樹学」としての自覚や「陽明学」としての自覚を具体的にどのように抱いていたのかを明らかにすることが出来る。

4. 研究成果

さて学祖中江藤樹が生涯苦心して模索していた入学への方法論や晩年に課題としていた「立志」の問題について、藤樹自身の位置付けの検討から、直弟子の淵岡山をはじめとした後学たちについてそれぞれ明らかにしてきた。

(1) 中江藤樹の学問の再考　これまでの中江藤樹研究を踏まえて、本研究においても、藤樹が学習者たちに対して学問成就に向けた着手の道を模索していたことが明らかにしてきた。すなわち末代儒学の基礎知識が前提にない時代において、徳川時代初期の儒者のひとりである藤樹の儒学受容の一端として『孟子』受容を確認した。羅山が『林羅山文集』や黒田長政に講義したときの記録を一書に編集した『卮言抄』などの書籍において『孟子』をどのように評価しているのかの比較検討をおこなった。羅山は、治政の心得を記した書として、武家にも伝わりやすいところを選び、集中的に有効活用しようとしたことが窺える。

それに対して藤樹は、四書を一体のものとしてみているため、『孟子』の内容も『大学』『中庸』などと一致しているということで、羅山にはない見解を開示している。『大学』『中庸』を重んじている一方、『孟子』を自らの儒学理解のなかにはほとんど独立して取り上げることはない。藤樹はまず四書というかたちで全体像を把握することから始めていた。

徳川時代初期における儒学受容のかたちを藤樹の儒学を通してみることで、と儒が一貫して学習者が学ぶときにどのような位置付けにあるのかを考えて受容していたことをみることが出来た。そのような「儒学を学ぶ」ことの道筋を模索していた藤樹の言説が、思索を始めた当初から晩年に至るまで一貫したのものとしてあったことを見直すことができた。

(2) 藤樹没後の藤樹書院　晩年の中江藤樹は学習者の「立志」を問題視していた。この問

題について、藤樹後学たちがどのように受けとめていたのか、まずは藤樹書院に残った面々である。

中江藤樹のところには、彼の学徳を慕った学習者があつまり私塾「藤樹書院」が開かれていたが、藤樹没後も地元の有力者が書院の維持に努めていた。藤樹の子・中江常省は、元々対馬藩に仕えていたが致仕して小川村へと帰郷していた。幼少の頃に父藤樹を亡くしているため藤樹から直接教えを受け継いだわけではない。しかし藤樹の子として、後年、藤樹書院で教鞭を執っていたのである。中江常省の書き残したものについて、これまで先行研究は皆無であった。そこで本研究では中江常省の文集『常省先生文集』を取り上げ内容の分析を行った結果、藤樹が最晩年に課題としていた、学習者の学問への「志」を惹起させることを課題とした所謂「立志」の問題を、中江常省もまた継承していることが明らかとなった。

「立志」についての常省の思索それ自体の独自性が問題なのではない。常省が説く教えは、中江藤樹の文言を多く含んでおり、藤樹が用いた言葉や熟語をそのまま「活用」する説き方になっている。

たとえば常省は「鳶飛魚躍之実理易_レ認、自実志立可_レ申候」(『常省先生文集』、『藤樹先生全集』五 425)と述べている。これなどは、藤樹が儒教經典『中庸』の注釈書『中庸統解』において『中庸』にある「詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵。言 其上下察也。君子之道、造端乎夫婦。及其至也、察乎天地。」の一句を「上文ニ学者ニ志ヲ立シメ、自棄自暴ノ病ニ針シ、此ニ至テ詩ヲ退テ夫婦ノ虞モ、齊シク天性ヲ固有スルナレバ、コレヲ明ニシテ天真活潑ノ樂ヲ得ルコト聖人ノ樂ト同一義ナルコトヲ鳶魚ノニツヲ以テ発明シ、(以下略)」と解説した箇所にも則っている。このように、「陽明学」的であるかどうかではなく、藤樹の言説を踏襲することによって「藤樹の学問」を自らの主張の立脚点としていることを明らかにした。闇齋学派が師説を継承したように、藤樹の言説を踏襲して再生産するところに、学統を継ぐ意義があると見なしていたことが窺えるのである。

(3) 直弟子・淵岡山の再検討 藤樹書院において中江常省をはじめとした地元の有力者が書院維持に努めていた一方、藤樹の学問の興隆に力を尽くしたのは、仙台出身の淵岡山という直弟子である。岡山は、京都で学館を開いて拠点とした。京都を基点として会津、伊勢、備前などをはじめとした全国各地から藤樹の学問を学ぼうと志した者が上京してきた。そのような岡山は、藤樹の学問を人々に広げるときに、岡山なりの展開を遂げている。

岡山も「立志」に関する藤樹の課題を継承する。学問が「退屈仕事」となり、「志」が継続しないという質問が向けられた。それに対して岡山は、「一念心に勇御さ候而、何に而も手段手近合点参時は、又君子に可_レ至之安様に覚候ものに而御さ候」(『岡山先生示教録』巻三、五一条)のように述べ、「勇」の状態が「立志」に必要なだと答える。また岡山は、儒教經典『大学』内にある「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」の一句を踏まえて人の心が徐々に日々移り変わるものであることを述べ(=日新)、「只心上ヲ一洗シテ常ニ日新之功アラハ、則立志ノ基本タルヘシ」(『同上』巻四、二四条)と答えている。すなわち、「日新」の工夫によって、心が新たになることで、「志」を立てる基本となることを述べているのである。

これらを踏まえると、徐々に移り変わる心のなかで「勇」なる状態を保つことが「立志」の基本であると、藤樹の言説を一步抜け出て自らの言葉で「心」の問題を語り始めたことを意味するのである。

岡山は藤樹の思想性を継承しつつも、同時にそのアプローチを己の一身における修め方を重視する以上に實際生活のなかに落とし込み、他者との交流における心の在り方として藤樹学の活用を人々に説いていた。たとえば淵岡山は、「好き嫌いや得意不得意などを弁別するときは、自分にも すくみ はなく、他人をも すくませる 患いもない」と述べているように、自分の心を縛って、不自由になるのを避けて、他人と交流をはかることを求める「人間関係の学問」として再構成している。言うなれば「人付き合いの学」として修身の学を再構成したところに普及の鍵があると考えられる。

この説き方の展開が、ただ自らを修める学問だった藤樹の教えを誰においても日々のなかで活用出来る学問として提示したことを明らかにした。

(4) 淵岡山以後の「藤樹学」 淵岡山の指導のもと、全国へと藤樹の学問は広がったが、その後は大きな勢力となったわけではない。ただ会津喜多方においては、幕末までその学統が継承されていた。会津の学統でも藤樹や岡山の課題としていた「立志」についての言説を書き残している。それらからは、とりわけ「信」に重きを置いていることが窺える。学問を修める「志」を立てることは、この「信」を背後に有する。「信」を基点にする場合、「志」の惹起もまた信心にかかっているという主張は、信仰 として藤樹を尊崇する方向へと向かってゆくと同時に、人の心に本来存するはずの「良知」に関して「良知は天に在る」という主張を展開するに至った。もちろん、このような主張は後年軌道修正をはかる。ただ、藤樹のテキストを用いて自らが説いていた「良知」の発揮を「持敬」の構造と関係させて、学祖・藤樹の説いた内容は必ずしも「良知」のみを重視しているわけではない。そのような全体的な藤樹の著作と、

これまで自分達が説いてきた「良知」理解との接合を図ろうとした。会津学派での「良知」理解が行き過ぎていることで 藤樹の教え からのズレを意識したであろう親認は、再び藤樹の言説へと立ち戻ることで、「藤樹学」としての 心の鍛煉 の再構成を試みたと言える。藤樹の言葉を用いて 心の鍛煉 の方法論たる「持敬」や「慎独」を改めて論ずるようになったこと
の背景には、学統の維持への自覚が生じていたことがあった。

以上のように、淵岡山をはじめ、「立志」について藤樹以来の課題を継承していたことを見てきた。儒学を根本とするはずの藤樹の学問は、後の時代に下れば下るほど「中江藤樹」の言説が基点となっていく。そのため、大前提としての儒学以上に「中江藤樹」の継承となったことが、学派の形成に繋がると同時に藤樹の学問が広く普及しなかった要因のひとつであったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

高橋 恭寛、東アジアにおける『孟子』受容、日本学研究、査読有、26巻、2016、81-94

高橋 恭寛、藤樹没後の藤樹学、日本思想史研究、査読無、48巻、2016、56-72

高橋 恭寛、会津藤樹学派の展開と 藤樹の教え、研究東洋：東日本国際大学東洋思想研究所・儒学文化研究所紀要、査読有、7巻、2017、32-51

高橋 恭寛、淵岡山における 藤樹の学問 の展開、研究東洋：東日本国際大学東洋思想研究所紀要、査読有、査読有、8巻、2018、72-85

〔学会発表〕(計4件)

高橋 恭寛、苦悩する教師・中江藤樹、常省祭(307年)、2015

高橋 恭寛、徳川日本における『孟子』受容の一側面、国際シンポジウム「アジアにおける日本研究の可能性」、2015

高橋 恭寛、藤樹没後の「藤樹学」の展開、日本思想史研究会、2016

高橋 恭寛、日本における陽明学派の展開、蘭州大学日本語・日本文化研究会、2016

高橋 恭寛、藤樹学派における内心の問題、日本経済思想史学会、2017

高橋 恭寛、中江藤樹の弟子たちによる「藤樹学」、国際日本学フォーラム研究発表会、2017

〔図書〕(計1件)

緑川浩司 著者代表、財界21、「論語」とリーダーシップ、207(180-207)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 恭寛 (TAKAHASHI Yasuhiro)
東日本国際大学・東洋思想研究所・准教授
研究者番号：70708031

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()